

太平洋戦争後の日系アメリカ人社会

——ジョン・オカダの『ノー・ノー・ボーイ』——

佐藤清人

I

1957年の出版以来まだ半世紀あまりしか経っていないにもかかわらず、John Okadaの小説*No-No Boy*は今やアジア系アメリカ文学の古典とも称されるほどの評価を得ている。第二次世界大戦において祖国日本がアメリカと敵対したことにより、戦時中には強制収容という差別的な扱いを受けることになった日系アメリカ人。そうした日系アメリカ人の戦後社会を描いたこの小説は、出版当時こそ完全に黙殺されてしまったものの、公民権活動が盛んになった1960年代を経て1970年代に入ると、俄然マイノリティの人々の注目を集めることとなり、そして今日の評価へと至ったのである。

小説の舞台は戦後であるが、物語の発端は戦前にさかのぼる。1941年12月に太平洋戦争が勃発し、その翌年、日系アメリカ人は全米10カ所に散在する収容所に強制的に転住させられた。しかもその後さらに1年ほど経過した1943年2月に、忠誠登録と呼ばれるアンケート調査への回答を求められた。名前や誕生日、性別などごく一般的な質問項目の後に、次のような俄には回答できない二つの質問項目がそこには含まれていた。

No. 27 Are you willing to serve in the armed forces of the United States on combat duty wherever ordered?

No. 28 Will you swear unqualified allegiance to the United States of America and faithfully defend the United States from any or all attack by foreign or domestic

forces, and forswear any form of allegiance or obedience to the Japanese emperor, to any other foreign government, power or organization?

この二つの質問の一方もしくは両方にノーと答え、アメリカ政府の徴兵を拒否した者は「ノー・ノー・ボーイ」と呼ばれた。オカダの小説はそうした「ノー・ノー・ボーイ」のひとりである Ichiro Yamada を主人公にした物語である。イチローは戦時中、兵役に就くことを拒んだために刑務所に入れられた。しかし、彼は戦後釈放され、戦争前に住んでいた Seattle の町に戻ってくる。オカダの小説はイチローがシアトルの町に戻ったところから始まり、ノー・ノー・ボーイという負の烙印を押されたイチローが戦後社会を生き抜く姿を描いている。

戦後の日系アメリカ人社会では、イチローと立場を異にする若者、すなわち忠誠登録のアンケートに「イエス」と答え、アメリカの軍隊に従軍して戦線に立ち、勲功を挙げて軍隊を退いた若者たちが、我こそは真のアメリカ人といった風情で町中を闊歩していた。こうした退役軍人の若者は、イチローのようなノー・ノー・ボーイを Jap と呼んで蔑み、両者の間には対立と衝突が絶えない。しかし、日系アメリカ人社会という狭いコミュニティでこそ退役軍人は粹がっているが、白人を中心としたより大きなアメリカ社会のなかでは、マイノリティにすぎない。人種差別や人種的偏見から逃れられるわけではなかったのである。要するに、退役軍人であろうと、ノー・ノー・ボーイであろうと、日系アメリカ人であることに変わりはない。多くの批評家が指摘するように、ジョン・オカダの『ノー・ノー・ボーイ』は、戦後の日系アメリカ人社会における対立と反目が解消し、コミュニティが融和していくプロセスを描いている。

ところで、日系人社会の融和、あるいは和解は、小説の最後の場面、すなわちノー・ノー・ボーイのひとりである Freddie が交通事故で亡くなり、その死を退役軍人のひとりである Bull が悲しみ、号泣する場面で暗示されているのだが、そこに至るまでのプロセスについては必ずしも十分に論じられてこなかったように思われる。小論では、もうひとりの退役軍人 Kenji が果たす役割に着目しながら、そのプロセスを具体的に跡づけてみたい。また、それと同時に、この小説ではアメリカにおける人種差別の問題がどう扱われているのかという

点にも言及してみたいと思う。

II

まず、本題に入る前に、小説の背景となっている第二次世界大戦から戦後にかけて日系アメリカ人がどのような状況におかれていたのか、手短かに述べておこう。日系アメリカ人の人々は二つの社会のなかで生きている。白人を中心としながらもさまざまな人種が寄り集まるアメリカ社会と日系アメリカ人のみで構成される社会（コミュニティ）の二つである。そしてこうした二つの社会で生きる日系アメリカ人にはひとつのジレンマがある。それはアメリカ社会において人種差別を受けることなく、白人と同等なアメリカ人として扱われたいという願いもしくは理想を抱く一方、現実的には、日系アメリカ人コミュニティにおいて同じ国からやってきた同胞と共に暮らさざるをえない、いや、むしろ日系アメリカ人のコミュニティのなかでこそ安らぎを感じ、平穩に暮らせるということであった。

太平洋戦争における強制収容は、そうした日系アメリカ人にとって二重の苦しみを与えることになった。ひとつは、同じ敵国人であるドイツ系やイタリア系のアメリカ人には行われなかった収容所への移転が日系アメリカ人にのみ強いられ、戦前から存在していた日系人に対する人種差別が、より鮮明に顕在化したことである。白人と同等に生きるなどということは遙か彼方にある遠い夢であり、そうした夢もはかなく崩壊してしまったのである。二つ目の苦しみは、忠誠登録が行われ、問題となった二つの質問をめぐって「イエス」と回答する者と「ノー」と回答する者との間で対立が起こり、日系人のコミュニティ自体も日系人にとって安住の場所ではなくなったことである。アンケートへの回答は親子で異なる場合もあり、対立はコミュニティのなかだけではなく、家族の内部にまでも及んだ。むろん日系人の社会と家族がすべて崩壊してしまったわけではないが、こうした対立が日系人社会と家族に与えた影響はじつに大きかったのである。

ところで、こうした対立と分裂に苦しんだ日系人社会は戦後どうなったであ

ろうか。退役軍人でありながら、イチローの友人でもあるケンジはこんな風に語っている。

“There were a lot of them pouring into Seattle about the time I got back there. It made me sick. ... They [a bunch of Japs] bitched and hollered when the government put them in camps and put real fences around them, but now they're doing the same damn thing to themselves. They screamed because the government said they were Japs and, when they finally got out, they couldn't wait to rush together and prove that they were.” (163-164)

ケンジの言葉は日系人に対してじつに辛辣で皮肉な言葉だが、日系人の行動様式について正鵠を射た発言でもある。日系人のなかにはNew YorkやArkansasなどに行き、日系人社会から離れて生活することを選んだ者もいるが、多くは戦前に住んでいたシアトルや西海岸の町に戻り、寄り集まって暮らすことを望んだのだ。しかしながら、こうして再び身を寄せ合って生活をするようになった日系人だが、その社会が戦前とまったく同じ社会に戻ったというわけではなかった。忠誠登録によって生み出された対立、分裂が尾を引いている。こうした状況を背景としてオカダの小説は展開している。

III

小説の主人公イチローは忠誠登録に「ノー」と答え、兵役を拒否したために2年間の刑務所暮らしを強いられた。刑期を終えて戦後のアメリカ社会にイチローが戻ったところから物語は始まる。イチローは自分で選択したにも関わらず、なぜ自分がノー・ノー・ボーイになったのかその理由がわからない。イチローの母は祖国日本に対して狂信的ともいえるべき愛国心をもつ女性で、そうした母の影響が大きいとは思いながらも、彼女のせいばかりとはいえず、真の理由を見出すことはできない。また、イチローは今ではノー・ノー・ボーイとなったことを大いに後悔している。さらに、忠誠登録で「イエス」と答え、従軍して

戻って来た退役軍人に対して引け目を感じている。シアトルの町で最初にイチローが会った知人のEto Minatoは、はじめは親しげな態度をとっていたが、イチローがノー・ノー・ボーイであることを知ると、彼の態度は豹変し、イチローを激しく罵り始める。しかし、エトのような退役軍人に対して引け目を感じているイチローは、一言も言葉を返すことができないのである。

ノー・ノー・ボーイとなったことに対する後悔と退役軍人に対する引け目は、小説の終わり近くにいたるまで、イチローの身に付きまとい離れることはない。退役軍人であり、イチローとは対極的な立場にありながら、イチローに対して友好的な態度を崩さないケンジは、イチローにEmiという女性を紹介する。ケンジの勧めで一夜を共に過ごすことになったエミが、イチローの犯した罪についてその本質を明快に語ってくれる場面がある。彼女は夫Ralphの兄Mikeとイチローを比較するのである。マイクは第一次世界大戦でアメリカ軍に従軍したにもかかわらず、強制収容に腹を立て、過激な親日派のリーダーとなってアメリカに反抗した。それに較べると、イチローの行動はいわゆる良心的兵役拒否にすぎないものであり、アメリカに逆らったわけではないというのがエミの論理であった。しかし、こうしたエミの主張もイチローの後悔の念を即座に払拭することはできない。それほどまでにイチローの自責の念は深いのだった。

さらにイチローの退役軍人に対する引け目を如実に示す一例は、ケンジとの会話のなかに現れる。ケンジは軍隊に入り、参戦したが、その結果片方の脚を失ってしまった。しかも失った脚はその後も悪化し、徐々に短く削られていった。しかし、ケンジはその代わりに「勲章、車、年金、おまけに教育」(“A medal, a car, a pension, even an education”)を手に入れたのである。イチローは脚の怪我のせいでケンジの余命が残り少ないかもしれないことを承知しながらも、次のように考える。

I'll change with you, Kenji, he thought. Give me the stump which gives you the right to hold your head high. Give me the eleven inches which are beginning to hurt again and bring ever closer the fear of approaching death, and give me with it the fullness of yourself which is also yours because you were man enough to wish

the thing which destroyed your leg and, perhaps, you with it but, at the same time, made it so that you can put your one good foot in the dirt of America and know that the wet coolness of it is yours beyond a single doubt. (64)

後悔と引け目を感じながら生きているイチローは、そうした状態から抜け出すために職探しに出かける。イチローは新聞の求人欄で見つけた会社に出かけて行き社長のMr. Carrickに出会う。キャリック氏は戦時中におけるアメリカ政府の日系人に対する不当な扱いを率直に認め、イチローが兵役拒否をしたことも承知の上で、彼の採用を申し出してくれる。しかし、イチローはキャリック氏に向かって“I'm not a veteran” (151) と繰り返し答え、そのありがたい申し出を断ってしまう。イチローの就職を阻んでいるのはアメリカ社会でもなければ、アメリカ人でもない。イチロー自身の感情が、心がそれを阻んでいるのである。

IV

それならば、イチローが立場を交換したいと願った当の相手ケンジは、はたして退役軍人である自分の立場に満足しているのだろうか。ケンジにはわずかな命しか残されていない。そうした運命を背負うことになったのは、彼が忠誠登録に「イエス」と答え、軍隊に入り、戦場に赴いたからだ。この小説のなかにはケンジと同じ、あるいは彼よりも悲惨な運命をたどった人物が紹介されている。それはKumasakaさんの息子Bobである。イチローが家に戻ってから、イチローの母は彼を連れて近所の知り合いの家を回る。日本の同じ村からやってきたAshidaさんとクマサカさんの家である。イチローはクマサカさんの家で息子のボブが戦死したことを知らされる。また、彼はイチローの母が、息子をアメリカの軍隊に入れたクマサカさんへの報復の意味を忍ばせながら彼をクマサカさんの家に連れて行ったこと、そうした母の卑劣さにも気づくのである。たとえ、刑務所に入ったとしても、アメリカの軍隊に入らなかったからこそ、こうしてイチローは無事に家に帰って来ることができた。イチロー母子のクマサカ家訪問の場面では、息子を死から守って勝ち誇るイチローの母の姿と息子

を戦死させてしまったクマサカさんの悲しみに沈む姿がじつに好対照をなして描かれている。しかし、真の勝利を味わうのは、必ずしもイチローの母というわけではない。

息子が従軍した結果、悲嘆に暮れる姿を晒すのはクマサカさんだけではない。ケンジの父も同様である。ケンジの父は、ケンジの入隊のときのことをこんな風に回想する。

He thought he remembered that he had not wanted Kenji to go into the army. But when he was asked, he had said yes. And so this son had come back after long months in a hospital with one good leg and another that was only a stick where the other good one had been. Had he done right? Should he not have forbidden him? Should he not have explained how it was not sensible for Japanese to fight a war against Japanese? If what he had done was wrong, how was it so and why? (122)

ケンジの父はケンジの入隊を思い留まらせ、ケンジの脚を失わずに済ませる方法があったのではないかと思い、悔恨の念を滲ませている。さらにケンジの父はケンジが亡くなった後、イチローとの会話のなかでこのようにも言っている。

“For him, I often think I should have never have [sic] come to America. For him, I should have stayed in Japan, where he would have been a Japanese with only other Japanese, and then, maybe, he would not be dead. It is too late now for such thoughts.” (184)

ケンジの父はケンジの命が失われたことだけを問題にしている。ケンジの退役軍人としての名誉は彼の眼中にはない。太平洋戦争では、アメリカ人兵士よりもその何倍も多く日本人兵士の命が失われた。仮にケンジの父が言うように、アメリカに移民せず日本に留まったとしても、ケンジは日本軍の兵士として死んだかもしれないのである。しかし、ケンジの父の考えはそこまで及ぶことはない。それはケンジの父が、少なくともこの時点では、ケンジの死をアメリカ

のための名誉の戦死として受け取ることができなかったことを意味している。イチローの母、クマサカさん、そしてケンジの父、彼らはみな日系アメリカ人一世である。戦後しばらくするまでアメリカに帰化することのできなかった彼らは日本人であった。ゆえに、アメリカのために死んだ息子たちの死を、彼らが名誉や誇りと感じられなかったとしても、それは当然であった。

次に、当の本人であるケンジ自身について見てみよう。ケンジは戦場で片足を失い、しかもその怪我のせいで軍隊を退いた後は、死の恐怖に怯えなければならなかった。そうした我が身を顧みて、ケンジ自身も従軍したことに割り切れない思いを抱いている。しかし、ケンジの場合には、生死だけが問題になっているのではない。むしろ名誉が問題なのだ。小説のなかにはケンジが従軍している間、あるいは退役軍人として戻ってきてから、彼が個人的に差別を受けたような経験を語る記述は見られない。しかし、日系人全体が差別される姿を見て、ケンジは自分のような退役軍人とノー・ノー・ボーイの間には大差がないこと、退役軍人がノー・ノー・ボーイに対して決して優越した立場にいるわけではないことに気づく。むしろ、あたかも違いがあるかのように振る舞う退役軍人たちに対してケンジは不快感を抱いている。イチローに向かってケンジはこう語る。

“Let them [veterans] call you names. They don’t mean it. What I mean is, they don’t know what they’re doing. The way I see it, they pick on you because they’re vulnerable. They think just because they went and packed a rifle they’re different but they aren’t and they know it. They’re still Japs. You weren’t here when they first started to move back to the Coast. There was a great deal of opposition – name-calling, busted windows, dirty words painted on houses. People haven’t changed a helluva lot. The guys who make it tough on you probably do so out of a misbegotten idea that maybe you’re to blame because the good that they thought they were doing by getting killed and shot up doesn’t amount to a pot of beans. They just need a little time to get cut down to their size. Then they’ll be the same as you, a bunch of Japs.” (163)

ケンジはイチローや他の二世たちが小説の終わりでようやく到達する認識、すなわち退役軍人とノー・ノー・ボーイの間に違いはないという認識に早くから達していた。こうした認識のために、ケンジはノーノー・ボーイとして再会したイチローに何の偏見もなく同じ日系アメリカ人として接することができたのだ。こうした認識は、ケンジが他の二世よりも一段高い所から、あるいはより大きな視野で物事を見渡すことが可能であったことを証明しているのだが、そんなケンジでも死と直面している自分自身の問題を解決することはできない。

退役軍人たちのなかにはこれみよがしに自分が退役軍人であることを誇示する人たちがいる。たとえばエト・ミナトの場合には、アイゼンハワー・ジャケットを着込んで町を歩いている。また、イチローがBurnside Streetのカフェで出会う日系人の店員はブロンズの従軍記章（the bronze discharge pin）をあえて人目につくように身に付けている。しかし、ケンジは他の退役軍人たちのように、自分が退役軍人であることを誇り、自慢するようなことはない。ケンジはアメリカの軍隊に従軍しようとも、やはり日系人はアメリカの社会では差別されるという現実を直視しているからである。ケンジが行きつけの酒場Club Orientalでひとりで酒を飲んでいるとき、ひとつの揉め事が起こる。ある日本人が二人の黒人を連れてその店に入ろうとしたところ、それを阻もうとした店のオーナーとの間で一悶着が起きたのだ。人種差別の問題を目の当たりにしたケンジは店を出てから、思いをめぐらす。

Was there no answer to the bigotry and meanness and smallness and ugliness of people? One hears the voice of the Negro or Japanese or Chinese or Jew, a clear and bell-like intonation of the common struggle for recognition as a complete human being and there is a sense of unity and purpose which inspires one to hope and optimism. One encounters obstacles, but the wedge of the persecuted is not without patience and intelligence and humility, and the opposition weakens and wavers and disperses. And the one who is the Negro or Japanese or Chinese or Jew is further fortified and gladdened with the knowledge that the democracy is a democracy in fact for all of them. One has hope, for he has reason to hope, and

the quest for completeness seems to be anything near at hand, and then ... (134)

その後、ケンジは人種差別が起こるさまざまな情景を次々に思い浮かべるが、人種差別の問題に対する答えは見つからない。ただ世界中には憎悪が満ち溢れているとを感じるだけであった。

しかし、ケンジがこうした答えの見つからない問題を前にして、差別のない社会が来ることを完全に諦めてしまっているかといえば、必ずしもそうではない。ケンジはイチローの将来について次のように勧告を与えるからである。

“It may take a year or two or even five, but the time will come when they’ll be feeling too sorry for themselves to pick on you. After that, head out. Go someplace where there isn’t another Jap within a thousand miles. Marry a white girl or a Negro or an Italian or even a Chinese. Anything but a Japanese. After a few generations of that, you’ve got the thing beat. Am I making sense?” (164)

余命わずかな自分には無理でも、この先何十年でも生きる可能性のあるイチローならば、将来において人種が混じり合い、人種の差別や区別のない世界の礎を築く可能性があるかもしれない、そんなケンジの理想がここには語られている。

ケンジの父はイチローに、ケンジの埋葬場所についてケンジが亡くなる前に話し合ったときのことを次のように述べる。

“I thought it was pretty nice when the community got together and secured permission to bury their dead in Washelli. For a long time it was only for white people, you know. True, they keep the Japanese dead off in a section by themselves, but still, I thought it was pretty nice. Ken, well, he was upset. ‘Put my ashes in an orange crate and dump them in the Sound off Connecticut Street Dock where the sewer runs out,’ he used to say. He knew I wouldn’t do that, but I’ll see he’s not put in Washelli. We’ll have a small service, just the family, and maybe they’ll find a place for him down there where he’ll be happy.” (183-184)

戦没者を埋葬する Washelli の共同墓地にケンジは埋葬されることを拒む。かつては白人のみに埋葬が許可されていたものが、今は日系人にも許可されるようになった。とはいえ、区域が別々に分けられているとすれば、それはアメリカ社会とまったく同じである。ケンジは死者となってからも永遠に差別され続けなくてはならない屈辱に耐えられず、ワシエリに埋葬されることを拒んだのであろう。ケンジでさえ、人種差別の問題の解答を見出せないまま、この世を去らねばならなかった。

V

ケンジは人種差別のないアメリカ人社会を理想としながらも、日系人社会が自分にとって居心地の良い場所であると感じ、充足感も味わっていた。すでに言及したクラブ・オリエンタルという酒場は、ケンジだけではなくイチロー、ブルやフレディなど日系人の若者が、ノー・ノー・ボーイと退役軍人の区別なく寄り集まる場所であった。クラブ・オリエンタルで過ごしながら、ケンジはこんな感想を抱く。

It's a nice place, he thought. ... I've got a lot of friends here and they know and like me. ... It's like a home away from home only more precious because one expects home to be like that. Not many places a Jap can go and feel so completely at ease.
(132-133)

クラブ・オリエンタルは日系アメリカ人コミュニティのいわば縮図である。ケンジはそこで自分の家にいるようなくつろいだ気分になることができた。他の二世の若者たちがこの店にやってくる理由も、おそらくは似たようなものであっただろう。だからこそ、お互いに忌み嫌っている相手がいることを承知の上で、ノー・ノーボーイも退役軍人もここに集まって来るのだ。お互いにいがみ合いながらも彼らがここに集まって来るのは、ノー・ノー・ボーイも退役軍人もじつは同類だということを無意識の内に感じ取っていたからにちがいな

い。しかし、このことをしっかりと認識していたのはケンジだけであった。

一方、現実の日系社会はどうであろうか。この小説のなかで日系社会全体が描き出される場面はほとんどない。日系人の家庭が個々に描かれる程度である。イチローの家では、父は雑貨店を営んでいるが、日本最良の母がいるせいで、その家庭にはアメリカ的な要素が微塵もなく、日本人家庭そのものである。一方、息子を戦場に送って死なせてしまったクマサカさんは、かつてはいつか日本に帰るつもりでいたが、今では家を購入し、「この地に根を下ろし始めた」のだった。クマサカさんの一家は息子を失ったにもかかわらず、アメリカ社会への同化の道を歩み始めたのである。

さらに、ケンジの家もクマサカさんと同様である。貸家とはいいいながら、ケンジの家はアメリカの家庭らしい雰囲気で溢れている。「マホガニイのテーブル」、「新しいじゅうたん」、「ラジオ」、「蓄音機」、「大きなテレビセット」など、部屋に備え付けられたどの品物も戦後のアメリカを象徴するものであった。こうした環境のなかでケンジの父は思う。

He had long forgotten when it was that he had discarded the notion of a return to Japan but remembered only that is was [sic] the time when this country which he had no intention of loving had suddenly begun to become a part of him because it was a part of his children and he saw and felt it in their speech and joys and sorrows and hopes and he was a part of them. (120)

すでに見たように、ケンジの父もクマサカさんも日本人一世であるがゆえに、その息子たちの死を名誉とすることはできなかったが、彼らがこのようにアメリカ社会に同化する志向を示しているのは、オカダがこの小説を書いていた頃にはすでに帰化法が変更され、日系一世の人々にもアメリカ人になる可能性が開かれたことが関係しているように思われる。小説の物語が展開する戦後間もない時代には、実際にはまだこの新しい法律は出来上がっていなかったのだが、オカダはすでに先取りした形で、一世の人々にアメリカの生活や文化に同化し、アメリカ人になる夢を見させたのではなかろうかと思われる。

一方、イチローの母にはこのようにアメリカに同化するなどという考えは及びもつかなかった。イチローの母は、戦後も日本の勝利を信じ続けたいわゆる「勝ち組」のひとりだったが、日本にいる姉から日本の窮状を伝える手紙が届き、それをイチローの父から突きつけられ、日本の敗戦を認めざるをえなくなる。その後彼女は文字通り狂気に陥って自殺を遂げてしまうが、一世の多くの人々がアメリカ社会のなかに同化していく波が押し寄せるなかで、ただひとりその波に乗れず、波間に身を沈めてしまったかのような感がある。イチローの母の葬式にはイチローも知らない多くの日系人たちが集まった。イチローにとっては何か居心地の悪い行事ではあったが、イチローの父にとってはこれ以上ない良い葬式であった。それまではアルコールに溺れ、存在の影が薄いイチローの父であったが、母の死後、彼の生活は以前よりも安定した方向に向かっている。父は店の整備を計画し、なかなか仕事の見つからないイチローに店の仕事を手伝うよう提案する。イチローもこの申し出を快く受け入れ、イチローの家庭も遅ればせながらアメリカへの同化を準備し始めたように見える。

VI

小説の最終場面は、すでに述べたように、イチローの友だちであるフレディが自動車事故で死に、その知らせを聞いたブルが号泣するという場面である。そこに至る前に、イチローはまずフレディとともに玉突き場に出かけ、玉突き場では、その店の店主の忠告も聞かず、フレディは自分勝手な行動をする。フレディはそれまでも同じアパートの別の階に住む人妻と性的な関係が続けたり、また、あるときには、エト・ミナトに絡まれ、逆にナイフで彼を斬りつけたり、無軌道な生活を送ってきた。それでもイチローはフレディが自分と同じノー・ノー・ボーイであることから、それまでは彼を友だちと見なし、頼りにもしてきたのだが、フレディの行動を見ながら、こんな感想を抱くようになる。

Ichiro felt deeply sorry for his friend who, in his hatred of the complex jungle of unreasoning that had twisted a life-giving yes into an empty no, sought relief in

total, hateful rejection of self and family and society. (241-242)

捨て鉢な行動をとり続けるフレディに対してイチローはもはや共感を抱くことはなく、むしろ軽蔑と憐憫を感じている。それはケンジが他の退役運人たちに感じていた侮蔑に近いものである。この後イチローとフレディはクラブ・オリエンタルに向かい、そこでブルと喧嘩をして、そこから車で逃げ出す途中でフレディは交通事故に遭って死ぬ。フレディの事故死の知らせにブルは涙を流すが、イチローはといえば、フレディの死を悲しむような素振りもみせない。むしろ、赤ん坊のように泣きわめくブルに対して同情するかのように彼の肩に手を置くのである。ようやくイチローはケンジと同じ立場に、同じ心境に立ったのである。ノー・ノー・ボーイも退役軍人も変わりはない、同じ「ジャップ」である。もはやノー・ノー・ボーイとしての負い目にイチローは心を悩ますことはないであろう。

VII

日系アメリカ人のコミュニティは戦争中の忠誠登録アンケートによって引き裂かれ、さまざまな対立や分裂を生んだ。戦後も日系人たちはこうした対立や分裂の影を引き摺らねばならなかったが、それでもなお完全に分裂・崩壊してしまうということはなかった。むしろ、ケンジの言葉にあるように、戦後も寄り集まることで、日系人社会を生活の拠り所としていたのである。言い換えれば、そうせねばならないほどに、アメリカ社会における日系人に対する人種差別が大きかったということであろうか。しかし、だからといって日系人が強い絆でひとつにまとまっていたかといえば、必ずしもそうではなかった。二世のなかにはアメリカ軍に従軍したことを誇りに思い、ノー・ノー・ボーイとの差別化を図ろうとする者がいるかと思えば、一世のなかには、イチローの母のように、息子を戦死させなかったことで自分たちの正当性を主張しようとする者もいた。こうしたなかで、ケンジの場合には早くから認識し、イチローとブルもやがて認識することになったのは、ノー・ノー・ボーイと退役軍人の間には、

アメリカという社会においては、何も違いはないということである。そして、あたかもそれが決定的な違いであるかのように思われた日系人社会のなかにおいても、それは同じように無意味なのであった。

この小説では、ケンジの言葉のなかにアメリカにおける人種差別への批判が散りばめられている。しかし、その問題の解決は、ケンジ自身が見出せなかったように、この小説自体も与えてはいない。ただ、ケンジがイチローに託した理想があるのみである。この作品がアメリカで公民権運動が活発になる1960年代に入る前に書かれたことを考慮すれば、それは致し方のなかったことであろうと思われる。一方、多数のマイノリティが存在するアメリカ社会のなかで、日系アメリカ人は祖国がアメリカと戦い、敵対するという特殊な歴史を歩んできた。しかも、それによって自分たちのコミュニティが真っ二つに分裂し、対立するという経験をした。こうしたことを踏まえれば、オカダがこの小説で取り上げたテーマは、日系アメリカ人にとって、アメリカ社会における人種差別の問題以上に切迫した問題であったことが理解されるにちがいない。

*本稿は、2011年度名古屋大学英文学会サマー・セミナー（2011年7月8日）の講演に基づき、加筆修正を施したものである。

参考文献

- Amoko, Apollo O. "Resilient ImagiNations: *No-No Boy*, *Obasan* and the limits of Minority Discourse." *Mosaic: A Journal for the Interdisciplinary Study of Literature* 33, no. 3 (2000): 35-55.
- Arakawa, Suzanne. "Suffering Male Bodies: Representations of Dissent and Displacement in the Internment-Themed Narratives of Jon Okada and Toshio Mori" In *Recovered Legacies: Authority and Identity in Early Asian American Literature*, ed. Keith Lawrence and Floyd Cheung. Philadelphia: Temple UP, 2005. 183-206.
- Kim, Daniel. "Once More, with Feeling: Cold War Masculinity and the Sentiment of Patriotism in John Okada's *No-No Boy*" *Criticism* 47, no. 1 (2005): 65-83.
- Ling, Jinqi. *Narrating Nationalisms: Ideology and Form in Asian American Literature*. Oxford:

Oxford UP, 1998.

McDonald, Dorothy Ritsuko. "After Imprisonment: Ichiro's Search for Redemption in *No-No Boy*." *MELUS* 6, no. 3 (1979): 19-26.

Okada, John. *No-No Boy*. 1957. Seattle: U of Washington P, 1976.

Sato, Gayle K. Fujita. "Momotaro's Exile: John Okada's *No-No Boy*." In *Reading the Literatures of Asian America*, eds. Shirley Geoklin and Amy Ling. Philadelphia: Temple UP, 1992. 259-81.

Sumida, Stephen H. "*No-No Boy* and the Twisted Logic of Internment." *AALA Journal*. 13 (2007): 33-49.

Yeh, William. "To Belong or Not to Belong: The Liminality of John Okada's *No-No Boy*." *Amerasia Journal* 19, no. 1 (1993): 121-33.

Yogi, Stan. "'You had to be one or the other': Oppositions and Reconciliation in John Okada's *No-No Boy*." *MELUS* 21, no. 2 (Summer 1996): 63-77.

大川真澄 「John Okada の *No-No Boy* における差別と同化の代償」『鳴門英語研究』20 (2007) : 55-66.

篠田実紀 「二分法を越えて: John Okada, *No-No Boy* の静かなる挑戦」『神戸外大論叢』61.3 (2010-2011) : 41-67.

デイ多佳子 『日本の兵隊を撃つことはできない』芙蓉書房出版, 2000.

森岡稔 「*No-No Boy* における "Cultural Identity" ——多文化主義的観点から——」『名古屋学院大学大学院外国語学論集』5 (2004) : 43-68

Synopsis

Japanese American Community after the Pacific War — John Okada's *No-No Boy* —

Kiyoto Sato

When the Pacific war broke out in 1941, Japanese Americans were relocated to the camp. While they had suffered from prejudice and discrimination since the beginning of immigration to America, they had enjoyed peaceful lives by cooperating with each other in Japanese American community. Although they had lived in a dual world-American society and Japanese American community, both worlds were now completely separated. Racial discrimination was publicly admitted, and when they were demanded to answer a questionnaire known as the “loyalty questionnaire” in 1943, Japanese American community was also enforced to split to the two parties: the loyal and the disloyal.

John Okada's *No-No Boy* describes how Ichiro, one of no-no boys, which the disloyal were called, struggles to live in American society after World War II. The conflict between the loyal and the disloyal lasts even after the end of the war. Ichiro is despised by veterans that joined the American army and fought for the country, but Kenji, one of the veterans behaves friendly toward him. For he recognizes that the difference between no-no boys and veterans or the superiority of veterans to no-no boys, which seems to be crucial to Japanese American community, turns out to be trivial and meaningless in broader American Society. Undergoing a lot of clashes, other Nisei, as well as Ichiro, come to realize that they are just the “Jap.”

On the other hand, most of the Issei people, banned from becoming naturalized until 1952, begin to assimilate into American culture. The ending of the novel suggests that Issei's assimilation should be promoted and Nisei's conflicts dissolved. But as for the racial discrimination; which is repeatedly criticized through some remarks of Kenji, we can't find any clues to the solution. Okada's novel, which was published just before the civil

rights movement was activated, didn't have enough nerve to argue against racism in America. We should be reminded that Japanese Americans were more urgent for the reconciliation within their community.